日本海区水産試験研究
連絡ニュース

第46号
新潟市万代島
日本海区水産研究所
印刷
株式会社新潟日報社
昭29・11・1日発行

日本海 ㊺

漁業計画について

山中義一

試験研究機関に居られる人々は平素漁業を行政的に視られる折がないし、又専門以外の問題には余り注意を払われない傾向とから、戦後、漁業の諸制度が少くとも法制的には大きく変革されたこと等については気附いておられない人もあるかもしれない。それで、この新制度と試験研究機関との関係について少少觸れたい。戦後の漁業法は漁業の民主化と漁業生産力の発展とを意図し、これを達成する方法として、先づ戦前からの漁業における諸々の関係を一旦全部法的に消滅させてしまって、新に漁業生産に関する基本的制度を定め、水面の総合的な高度の利用を図ろうとしたのであった。これを漁業者と漁業従事者とを主体とする漁業調整機構の運用によって、達成しようとしたのである。こゝに試験研究機関は如何なる役割を果すべきであろうか。先づ漁業制度の基礎となる漁業权の漁業であるが、以前は沿岸の浦々にはその村の漁業組合の持っていた専用漁業权や個別の定置、特別、区画の漁業权等が時期を異にして、早いものがちに、ばらばらに綜合的な考慮は殆どなく免許されていたのであったが、新漁業法では、海面の総合的な利用を考えながら、漁業权を設定すべき予定漁場を選定し、県下の海区でとに一斉に時期を限って公表することになっている。この漁業权漁場をいかなる漁業種類につき、何処に選定するかという事が即ち漁場計画の基底である。

勿論漁場計画は単に漁業权の漁場ばかりでなく、他の許可漁業等についてもその漁場の利用方法を如何にするか計画する。即ち漁場計画こそは最も基本的な大切な事柄である。計画は如何にして、誰が樹立するか、新法後最初の現在の漁業权のそれは、漁民の意見を組織立てゝ作るという行方をとった。このやり方は勿論誤りでなく必要でもある。計画には当然その海面の自然的な諸条件は勿論、その海面に対する近傍漁村の社会経済的な種々の条件、関係、依存度等が明らかにされている必要がある。第一回計画の時これらの事こそは試験研究機関によって或程度の素材提供がなされて然るべきと考えた人々も勿論あった。然しながら残念にも材料は余りにも少なかった。そして前述のように漁民の声の調整の上に計画は定まったか、或は皆と殆ど変らない漁業配置の計画しか出来上らなかった。果によっては水試の方々が相当関与された処もあるかもしれない。然し一般には余りタッチされなかったのではなかろうか。魚群・海水・海底・漁場等の自然的条件はもとより、漁業、漁民、漁村の事、又これらをめぐる社会経済的問題等、一として研究対象、調査対象たらざるものはない。漁業者や従事者は勿論、制度も、行政庁も試験研究機関の発言助言資料の援助を求めているのである。次の漁業权の切替、漁業計画樹立の時期は二年足らずの後に迫っている。今度こそは何等かの寄与を期待したいものである。

（日水研調査室）

主なる項目

―第四十六号―

漁業計画について　山中義一
衆院小林水産委員長日水研視察
日本水産学会水産食品分科会
日本海イワシ底魚資源調査
日本海区水産研究所連絡協議会開催さる
魚探　内橋潔
直江津市立直江津水族博物館発足
日本水産学会沿岸漁業分科会開催
底曳新漁場発表会開催
白山丸の活動
第四十五回研究諮詢会
人事異動

衆院小林水産委員長日水研視察

衆議院小林水産委員長は十月三十日、日水研を視察された。

日本水産学会 水産食品分科会

日本水産学会の水産食品分科会は、十月二日～四日の三日間に亘り清水市の缶詰会館で開催され、参会者は百数十名に達し、極めて盛会であった。

研究発表は五八講で各方面に亘ったが、日水研からは野口技官が出席、「魚肉・死い」の現象に関する研究、第三報及び第四報」を発表した。第二日の午後は、缶詰食品に関するシンポジウムが開催され、業界及び学会からの発言も極めて活発で、約五時間に亘り、缶詰の原料から製造技術全般に亘り、主として鮪缶詰に関して討論された。第三日は南海区水研中村所長の「世界マグロ漁業の現勢」及び京都大学清水教授の「水産食品今後の方向」の特別講演があり、午後は缶詰工場、製缶工場等の視察を行った。

日本海いわし底魚資源調査 連絡協議会開かれる

去る十月十八日秋田市において関係府県（青森、新潟、鳥取、島根）水産試験場が参集され底魚資源調査連絡協議会が開かれ、十九、二十日秋田県男鹿市議会議事堂で日水研及び日本海関係、十二府県水産試験場約四十名の参集の上、第六回いわし資源調査連絡協議会が開催された。

会議の次第は左記の通りであるが特に第一回目の研究発表は各府県とも充実した内容のものが発表された。なほ地元の業者も参加された懇会に漁業者と密接な関係にある、北部日本海の大羽いわしの漁況予想について、地元秋田県水産試験場の要望もあって日水研下村開発部長の特別講演もあり、盛会の裡に終了した。

記

第2回底魚資源調査連絡協議会議事日程

第一日（十月十八日）

一、挨拶　日水研資源部長
一、議長選出　日水研資源部長
一、議事
　(イ)底魚資源調査経過報告
　(ロ)次年度の計画についての検討
　(ハ)要望事項、其の他

第六回いわし資源調査連絡協議会議事日程

第一日目（十月十九日）

一、開会の辞　秋田県水産試験場長
一、挨拶　日本海区水産研究所長
一、祝辞　秋田県商工水産部長
一、座長選出
一、研究発表

第二日目（十月二十日）

一、議長選出
一、議事
　(イ)昭和二十九年度調査研究結果概要報告
　(ロ)昭和三十年度調査研究に関する打合せ
　協議会、その他

研究発表

第一部　いわし関係　座長　秋田県水試水野場長

一、昭和二九年度島根県におけるまいわしの成長について　島根水試　藤　葉　忠
二、日本海まいわしの資源について　日水研　渡辺和春
三、新潟県沖合に於ける大羽いわしの二、三の考察　新潟水試　丹羽正一
四、イワシ流刺網の特性と魚群の関係について（予報）　鳥取水試　中野麟一
五、まいわしの産卵について　秋田水試　山口正男
六、産卵量推定の基本方程式について　日水研　山中一郎
七、特定水域の産卵量推定の一例　日水研　伊藤祐方
八、標流瓶投入の結果について　秋田水試　能条正義
九、夏季（七月）北部日本海における海流瓶調査の成果　青森水試　田名部正治
十、一九五三年青森沿岸における大羽いわしの不漁を招来した海況の一考察　青森水試　田名部正治
十一、山口県いわし流刺網の書関採集に関する考察　山口水試　能美久夫

特別講演

北部日本海漁況と対馬暖流との関係　日水研　下村敏正

第二部　底魚関係　座長　青森水試　杉田場長

一、底曳網漁業試験結果よりみたる底魚の分布状況　新潟水試　丹羽正一
二、陸上調査よりみたるスケトウダラの一考察　新潟水試　浦井憲蔵
三、新潟県スケトウダラの産卵についての一知見　日水研　大内明
四、鰺ケ澤近海のムシカレイについて

注意をしていても時々活動写真と言って実はれている。言葉は生きているのだから、私などは半分死んだのを使用していろ処に実はれる理由がある。しかし、こんな言葉を得意で使っているのではない。かってのこと活動写真と云う言葉が生々しく脈動していた頃の余命が残存しているだけの話で、もっとしたら、こんな言葉も通じなくなってしまうだろうが、思うと心細くなる始末である。

こんな風にして、何にも彼も次第に変って行くのが時世時節と言うものである。その頃名もない庶民が詠んだ万葉のどの歌にしても今時では多少とも国文学や古語の知識がなかったら理解しがたいように、古いことと昔のことは何にも彼も忘却の彼方に消えて行く。過去を忘れて次から次へと新しいものに移って行くことは出来るであろうが、もし、そうしたら来た方向や出発点がわからなくなり、同じ場所を巡回しているかも知れないのである。

古きを温ねて新しきを知るなどと言ってはいるが、過去のことにも限度があって、そう細部に亘りわかるものでない。しかし、何処にどうした理があってそれが発生し、それがどのように移り変って現在まで来たかを知ることなくて、今の向きも在所も定かではないであろう。

裏日本の恵まれない日本海側でもその土地相応の過去の水産があるのに地方が忘却されて、先人の努力の足跡や成果が見極められないことである。これは、まことに惜しいことで、何とかしたい処であるが、今のところ如何ともいたし難い感もある。一応厂史などと言うものは、自己意識のある程度の確立がなくては生れ出ないものである。こうした意識が水産業界に無いとしたら一応の厂史のないことも当然のことで、言う方が早まっているのであろう。

魚探

内橋　潔

(42)

然し、裏側の北日本の北洋出漁にしても、富山あたりの定置漁業にしても、山陰の地方の底曳にしても、もう一世代をすぎて、二世代も半葉以上に達している。言はば半世紀以上の過去をもっているのであるから、もうそろそろと過去を省察して、今後の前途の糧としたり、又先人の為事を継承して、大成しようとする態の所謂一応の厂史を編述する時代となっていると思う。

徒らなる過去への郷愁ではない。現世をよりよく荷って行くためにはこうした為事が如何に大切なものであるか、そんな事をこゝに事新しく言はなくてはならない程物わかりの悪い水産人もない事であろう。こんな種類のことを大事件の様に言うのは、文化主義とか文治主義とか言うこともよい。

現実の生るか死ぬかと言う苦斗を見ないでそう右から左へ役立ちそうにもないことを思いとする者に投げられた嘲笑の代名詞であるが、生死の斗いは斗いとしておし進める一方その中にあってこんな文化主義も一応は理解されなくては、真の意味の文化の進展とか産業の健全な発達は望み得ないものである。

（日水研所長）

五、鰺ケ澤近海のホッケについて　青森水試　寺島　朴

六、アブラザメの生態調査　青森水試　鶴川正雄

七、アブラザメの生態と肝臓ビタミンA含有量　青森水試　竹花毅

以上

今後の調査の重点及び主な決議事項は次の通り決定を見た。

(一) イワシ資源調査

1. 資源変動を解析するには更に生物学的、生態学的の基礎研究の必要性が確認され、今後更に追究することになった。

2. 資源の量的予想も或程度の徴候が見られるが、長期に亘る資料の確保が必要で従来の陸上調査を多少簡素化してゞも、今後継続的に実施の必要がありなほ昨年と同様小羽、中羽いわしの調査を重点的に実施する。その他の項目は昨年と同様に重点的にとり上げて調査を行う。

3. 日本海北部の大羽いわしの漁況予報はこ数年同或程度可能になって、その成果を上げているが、西部日本海でもその必要性が認められ、今年から西部日本海の大羽いわしの漁況予報についても重点的にとり上げ日水研が中心となって組織的な漁況予想のための海洋調査を実施する運びとなった。

4. 今回の第一回目に発表された要旨については、今後の参考資料とするため、日水研が取纏め印刷して関係者へ配布することになった。

5. その他の議題として対馬暖流水域開発に

関する全額国庫補助金交付について討議があった。対馬暖流水域開発に関する予算は昭和三八年度より本格的に予算化され、既に二ケ年を経過し着々その成果を収めている実情にある。従来の本調査研究費は国庫補助金二分の一、県費二分の一によって計上されてまいったのであるが地方自治体の窮迫した現既では今後の県費二分の一すら予算化の見透は困難な状態にあってこれが対策として本調査の使命の重要性に鑑み全額国庫補助金を交付されるよう日本海関係十二府県水産試験場長が近く衆・参両議員議長、水産選出議員、農林大臣、水産庁長官を始め各関係者へ陳情書をもって上京することに決議した。

6. 次期いわし資源調査連絡協議会の会場は島根県で開催することに決定した。

(二) 1. 底魚資源調査

底魚の場合、魚市場のみの魚体調査では偏りが多く出て来るので、各水試独自で行う底魚試験船調査とかみあわせ出来得るだけ偏りをなくす。

2. 機船底曳網でとられた資料のみでなく広く他漁法からの資料を織りまぜてゆく。

3. 今後は、各調査担当者の調査意欲を高める意味でも、各水試毎に調査プランを樹て取纏めも自力で行うようすべきであること。

4. 一部某から調査対象魚種の変更の要求があったが、辞退した。

5. 各県水試とも、系海未利用漁場の開発に主力が注がれていることは注目すべきことである。

6. 次期会期について、底魚担当者会議前に開いてもらいたいとの要求があったので、いわし会議とも関係があるので、これらを勘案して実施することにした。

直江津市立 直江津水族博物館発足

既団法人直江津水族館は去る六月一日より市に移管され、市立直江津水族博物館として発足した。今後に於いても従来通り、水族館に於いて水族の生活状況を一般に観覧せしめると同時に、博物館的活動を推進することになっている。

尚、館長は従来通り金井政雄氏、学芸技官補武田信昭氏（直江津市）

日本水産学会 沿岸漁業分科会開催

日本水産学会主催の沿岸漁業分科会は、来る十一月六日～八日、三日間にわたり、兵庫県明石市に於いて開催。

底曳新漁場発表会開催

日水研主催の底曳新漁場発表会を左記の予定にて開催。

於新潟市　十一月十六日（新潟県と共催）
於酒田市　十一月十八日（山形県と共催）
講師　水産庁、日水研、石川・新潟・山形各県の県及び水試

白山丸の活動

石川県水試の白山丸は、九、十月佐渡北方の向瀬、鼠単瀬等に於いて、約百回の曳網試験をなし、新漁場として同地方が極めて有望なることを立證した。その結果は近く同水試より公表の予定。

（日水研）

第四十五回研究談話会

十月二十七日、日水研講堂に於いて第四十五回研究談話会が開催された。

尚、演題及び発表者は次の通り

一、海中におけるマイワシ卵の浮遊状態について　西村三郎（資源部）

二、八つ張網漁業について　尾形哲雄（資源部）

三、現代の漁業制度について　山中義一（資源部）

人事異動

金沢大学動物学教室、定塚謙二氏は去る五月以来、日水研開発部に於いて下村博士指導のもとに海産プランクトンの研究中のところこの程帰学、全教室助手に任命された。